

第8回報告

なぜ反対同盟は60年も続いてきたのか

4月15日(土)に百里公民館で、8回目の「百里を語る会」が行われ、9人が参加しました。今までは平日の午前中に開催してきましたが、参加車の都合も考慮し今回からは土日の開催に変更になりました。

今回のメインテーマは、「なぜ反対同盟は60年も続いてきたのか」です。講師の伊達郷右衛門氏が、その要因を3つの観点から提起しました。

I 「営農確立こそ基地闘争だ」—百里の陸田化

1964年～67年頃に、百里では畑の陸田化が進みました。その先鞭をつけたのは宮澤昭さんだったようです。それまでの百里の農家はさつまいも・落花生・トウモロコシなどを作付けして専業農家として生活していましたが、収入は低く厳しい生活を強いられていました。減反政策が始まる前、米は食糧管理制度の下で価格が保障され、1～2町歩でも十分に生活できる状態でしたので、陸田化により百里の農家の生活も安定し運動を継続することができたのではないのでしょうか。もちろんその背景には、戦争の悲惨な体験がありました。

II 多彩で力強い百里への支援

1965年の百里基地懇談会の結成と一坪運動の取り組み、初午祭りの恒例化が最初の大きな力になりました。また1975年の百里基地反対連絡協議会の結成と東京高裁傍聴・宣伝や新一坪運動も運動を盛り上げました。1983年の「百里から最高裁への平和行進」、1984年の「10・21百里5千人集会」、2006年の1000人参加での「F15来るな2・25百里集会」などもありました。さらに1978年にさつまいも作りからスタートした「百里平和農園」、1987年の騒音調査、1990年の日米共同訓練反対行動、1989年の百里平和公園完成など多彩な取り組みが行われてきました。この間、1988年に発足した百里平和委員会、再建された県平和委員会も反対同盟と共に多彩な運動を展開してきました。

III たたかいの「武器」 各種パンフ、本、チラシ、マップなど

運動支援宣伝するために多くのパンフ、本などが作成・配布されました。1989年のパンフ「百里」、1998年の「百里物語」、2013年のマップ「百里」など。